研究論文

イエローストーン国立公園の成立とその理想化

伊藤 太一*

The Birth of Yellowstone National Park and its Idealization

Taiichi Ito

摘要: 世界初の国立公園となったイエローストーンは、自然環境を保全し公共の利用を確保するために成立したと言われている。本論では諸説ある成立過程を、これまでの研究成果にもとづいて整理・検証するとともに、真実よりも理想化されたイメージの方が一般に知られるようになった理由を探った。まず成立過程に関しては、自然環境の保全ではなく間欠泉などロマンティズムやナショナリズムの対象となるモニュメントの私有化を阻止し観光を振興するのが動機であることが明らかになった。その後、公園局などの関係者と公園に夢を託す人々による国立公園の成立過程やその理念の理想化が進められ、国立公園の現実の「自然」と一般の人々の描く幻想としての「自然」とのギャップを助長する結果となった。

1. 研究目的と方法

(1) 目的

1872年にイエローストーン (Yellowstone) (写真-1) が世界最初の国立公園として設立され、その後、国立公園制度が世界に広まったことは、アメリカが世界の文化に貢献した例として認識されている¹⁾。今日多数の日本人も含め年間200万人以上が訪れているにもかかわらず、その成立史を正確に記した文献が日本には皆無であるだけではなく、アメリカ国内でも成立背景を理解する人は限られている。

そのため、すでに50年以上前に否定されている公園成立エピソードが、最近の日米の国立公園紹介文献にも頻繁に引用されている状況にある。それらには国立公園化の考えが1870年の探検隊が川のほとりで焚き火を囲んでキャンプした際に突然と閃いたような説明が見られるが、自然公園あるいは保護地域の考えは、カトリン、ソロー、エマーソン、マーシュらによって19世紀半ばに提示され、具体的な空間としてもヨセミテ渓谷の保全例²⁾があり、イエローストーン国立公園生成法は1864年のヨセミテ州立保留地設立法に極めて類似している。

このような歴史的事実が紹介されないまま、公園の理念に関して様々な解釈がなされている今日、原点に戻ってその成立過程を振り返ることは今後の公園のあり方に対して示唆するところがあるだろう。そこで、本論では成立過程を史実に基づき批判的に検証した上で、公園の設立が理想化された背景を明らかにして、今日に至る国立公園管理の問題の解決の糸口を探った。

写真-1 ジャクソン撮影オールドフェイスフル間欠泉 (Old Faithful Geyser by Jackson, 1871)

(2) 方法

初期のイエローストーンの歴史に関しては、1895年に出版されて以来好評で版を重ねたチッテンデンの著書³⁾⁴⁾が有名であるが、むしろ、国立公園の支持者であったク

*京都大学農学部

ランプトン上院議員が1932年にとりまとめた内務長官への報告書⁵⁾の方が、資料に忠実に基づいているので評価に値する。同様に、初期の国立公園史に関してはバックの論文⁶⁾も参考になる。ここでは、近年の研究の成果も盛りこまれたヘインズ^{7,8)}とパートレット⁹⁾の文献を重視して、成立までの概要を整理した。可能な限り原資料に当たったが、今日入手が困難なものは、参考文献の巻末資料として掲載されたものや資料集に所収のものを活用した。文献によって見解が異なる場合には、引用資料から信頼性を比較検討した。

次に、このようにして明らかになった成立過程がその後理想化されていく様子を、1990年までの日米の50編ほどの関連文献における公園成立の紹介内容から調べた。それによってチッテンデンによるラングフォードの日記の紹介に端を発する理想化された成立過程の普及に、出版物やインターネットが及ぼした影響とその背景を明らかにした。

なお、日本の国立公園は自然公園の1カテゴリーとして指定されたが、アメリカの場合には自然公園と言う概念で国立公園を捉えていなかった。アメリカにおいては歴史的空間や都市公園の空間などが国立公園システムに含まれていることから明らかであるように、都市公園に対する自然公園として位置付けられているわけではない。また、当初は個別に対処していたので国立公園としての設置基準も存在しなかった。国立公園の概念を統一させようとしたのは公園局ができてからのことである。以上の理由により“national park”という言葉が日本では国立公園と訳されているのに対して、当時は連邦政府が所有する土地に設立された公共のための空間を意味するに過ぎない。このようにアメリカの“national park”と日本の国立公園の実体には違いがあるが、本論では、“national park”を意味するものとして国立公園という言葉を用いる。

2. 先駆者たち

19世紀の初めに毛皮を求めて白人がこの地域を訪れるようになる遥か以前から先住民たちはこの地を生活、あるいは狩猟の場として利用してきた。そのことは公園内各所に発見されている遺跡からも明らかである。ジャネットスキー¹⁰⁾によれば、氷河が後退した8500年前からその利用は始まり、公園内で産出される黒耀石は紀元前にオハイオで使われている。紀元前にパノクトレイル(Bannock Trail)と呼ばれるイエローストーン北部を抜け、ロッキー山脈を越えるルートが存在し、19世紀前半からは白人の罾猟師や探検隊も利用していた。クロウ(Crow)、ブラックフット(Black Foot)、ショショニ(Shoshone)の3部族が公園地域を利用し、狩猟や採集のため訪れていただけでなく、狩猟動物の繁殖を

増進するために数千年にわたって火入れをしていたという。また、冬は非常に厳しかったものの地熱を利用することも可能であった。

白人たちが初めてこの地域に足を踏み入れた頃に住んでいたのはショショニの系統のシープイーター(Sheep Eater)とよばれる少数のツカドゥカ(Tukaduka)族で、公園地域に1800年頃から定住し始めたと言われる。西部開拓の進捗にともなう周囲に移民が居住するようになっていってもイエローストーン地域だけが空白状態に置かれた理由として、好戦的なブラックフット族が、その地域を行動圏としたことが理由としてあげられる。

罾猟師、金採鉱師などの活動は国立公園の設置とは関わりが薄いと思われがちであるが、彼らのもたらす情報が調査隊の派遣に結びついただけでなく、国立公園の生態系管理が重要となっている今日、人間の影響が比較的少なかった公園設置以前の自然環境を知る上でも、先駆者としての彼らの記録は貴重である。そこでゴワンス作成の当時の文献・地図資料集¹¹⁾などを参考にして調査隊以前の情報を以下にまとめた。

(1) 罾猟師の時代

1800年ごろからビーバーなどの毛皮を目的としてトラッパー(trapper)と呼ばれる罾猟師がロッキーの山々を訪れるようになっていた。イエローストーン地域が初めて白人の目に晒されたのは、1805年ごろといわれている。その後1840年頃まで100人以上のトラッパーたちがビーバーを求めて訪れているようであるが、彼らの多くは文盲で記録を残さなかった上、誇張したほら話を一種の余興として利用したので、イエローストーンの驚異的景観の話をして信ずる人が少なかった。しかし、彼らが高度な技術をもった専門職であったという認識に立てば、この地域に精通していた彼らが、有望な罾場を知れることを望まなかったため、作り話を混在させて、その情報をあいまいにさせたとも考えられる。

当時、毛皮取引はアメリカの経済生活の最先端であり、ビーバーは毛だらけの銀行券とよばれるほど価値が高かった。だが、1840年頃になるとビーバーの激減と、山高帽の素材がその毛皮から絹に変更され需要がなくなった結果、罾師たちの活動は途絶えた。しかし、彼らが残したイエローストーンに関する情報は後の探検隊派遣にも影響を及ぼしただけではなく、その地図が活用されていた。

そのような罾師の中で1803年10月15日から1806年8月5日まで西部を踏査したルイス・クラーク(Lewis & Clark)探検隊の一員であったコルター(John Colter)は特に有名である。探検隊から離れてからの数年間に彼の辿ったルートが1814年の探検隊の公式地図にも記されたことから、彼がイエローストーン地域を訪れた最初の白人とみなす文献もいくつか見られる。だが、地図と照らし合せて資料を検討したヘインズ¹²⁾は、彼がイエロー

ストーンを訪れた確証はないと論じている。また、従来イエローストーンを指していると考えられた「ホルターの地獄 (Colter's Hell)」と呼ばれる場所はイエローストーンではなく、現在のワイオミング州コディ (Cody) の近くの場所であることも確認されている¹³⁾。

1822年にアシュレー将軍 (General William Ashley) は毛皮会社を設立し、毛皮を求めてミズーリ川を遡行する100名の屈強な若者を募集した。彼の会社はランデブーシステム (rendezvous system) を採用して、トラッパーが毛皮と必需品を出向いて交易する手間を削減した。そのメンバーであったポッツ¹⁴⁾は、1827年に兄弟に宛てた手紙の中でブラックフット族に毎日のように威嚇されていることを記すとともに、イエローストーン湖や地熱現象について述べている。1929年に同様にトラッパーとなったミーク¹⁵⁾はインディアンの攻撃を受けた折、仲間とはぐれて今日のノリス間欠泉地域 (Norris Geyser Basin) に足を踏み入れ、その記録を40年後に書き記している。

一方、アシュレーの会社のライバルとなったアメリカ毛皮会社 (American Fur Company) の社員フェリスはランデブー地点での交易に随行した際、トラッパーたちからイエローストーンの話聞き、好奇心にかられて訪れた。1842年に週刊誌 (Western Literary Messenger) に掲載された彼の記録¹⁶⁾によれば、1834年5月にマディソン (Madison) 川源流の煮え立つ泉のうわさ確かめるために、回り道をしてイエローストーンを訪れたと述べている。彼による間欠泉地域の描写は生き生きとして鮮明な上、1836年に彼が記したこの地域の地図は他のものに比べて正確である¹⁷⁾。ヘインズ¹⁸⁾は彼が好奇心から訪れた最初の観光客である点、元測量技師であったためかその記述が以前のものに比べてきわめて正確である点、初めて間欠泉を "geyser" と表現していると言う3点で注目している。

フェリスの滞在が数時間に過ぎないのに対して、ラッセルは1835年7月28日に最初に訪れて以来、5回にわたってイエローストーン地域を隈無く歩き回っている。彼はトラッパーであったが、その文章は正確かつ表現豊かである。最初の訪問でラマー谷 (Ramar Valley) を訪れた際には、その景観を叙情的に記し、美しいその場所で一生を過ごしたいくらいだと述べている¹⁹⁾。2回目には後述するブリッジャーの率いる狩猟グループに属していた。

その1804年生れのブリッジャー (Jim Bridger) は、ポッツと同様、1822年にアシュレーの募集広告で応募しトラッパーとなった²⁰⁾。彼自身は記録を残さず、ほらふきで有名であったが、毛皮猟が終焉してからも砦 (Fort Bridger) を設置・定住し、長期間にわたって案内人として活動したため、彼の知識に対する信頼性が評価され

ている。毛皮取引の最後の年、1840年にはベルギー人の宣教師デスメット (Pierre-Jean deSmet) が毛皮会社の一行と共にランデブー地点であるグリーンリバー (Green River) を訪れている。そこから彼が実際にイエローストーン地域に足を踏み入れたかどうか不明であるが、1851年にブリッジャーの情報に基づいて地図を作成している²¹⁾。最後のランデブーの後、ブリッジャーは砦でオレゴン開拓に向かう幌馬車を相手に商売を始めるとともに、1840年代には好奇心にあふれる金持たちをガイドしている。さらに陸軍ガイド兼インディアン通訳として、レイノルズ探検隊を案内している。なお、後に国立公園設置に関わったラングフォード (Nathaniel Pitt Langford) は1866年にブリッジャーに会ってイエローストーンの間欠泉などの話を聞き、興味を抱いたと日記に記している²²⁾。

(2) 金採鉱師の時代

10年ほどの空白期間をおき、1850年代になると1848年にカリフォルニアで金が発見されたことに影響され、イエローストーンを取巻く地域にも一攫千金を狙って金採鉱師たちが押寄せ、その一部はイエローストーンに足を踏み入れているが、その数少ない記録においてもその記述は景観よりも金の有無が中心となっている。

そのような中で、測量技師デレシイ (Walter W. DeLacy) は、1863年8月に42名からなる寄せ集めの金探索隊の隊長としてスネイク川 (Snake River) を遡りイエローストーン地域に達した²³⁾。この一団は砂金探しが目的であったため、今日の公園地域の南西部に部分的に足を踏み入れたに過ぎないが、彼はその後モンタナ準州の地図作成責任者となり、1865年にモンタナ最初の公式地図 (Map of the Territory of Montana with Portions of the Adjoining Territories) を作成し、イエローストーン内に地名を命名している。この地図がフォルサムらの情報を元に1869年に改定され、ウォシュバーン隊によって利用されることになった。

他にも金を求める人々がイエローストーン地域に足を踏み入れているが、いずれも発見できなかったため、その話を伝え聞いた採鉱師たちの足が遠退いた。

3. 調査隊の派遣

毛皮や金ではなくイエローストーン地域の自然環境自体を目的とした隊が組織される頃には、上述した記録を残した者以外にも100人を越える白人が訪れ、その地理情報も正確になっていた。その点で調査隊の派遣は、未知の世界の探検と言うよりも、巷に流布する情報の確認とその社会化という点で認識されるべきである。

(1) 関心の高まり

1859年4月13日にレイノルズ (William F. Reynolds) 隊長の率いる工兵隊 (Corps of Topographical En-

gineers) がイエローストーン地域の調査を命ぜられた。そのガイドとしてイエローストーン地域を熟知したブリッジャーが雇われた。この調査隊は初夏に南側から行動を開始したため、深雪と険しい地形に行動を阻まれた。また、与えられた調査期間も短く、南北戦争勃発のためイエローストーンの周囲を探索するにとどまった。それでもこの調査を踏まえて作成された地図には、ブリッジャーからの情報をもとにイエローストーン地域の地形が書き加えられた。この調査報告²⁹⁾は南北戦争後の1868年によく出版されたが、地図はそれよりも数年早く印刷されていた³⁰⁾。この探検隊には1871年に大規模な政府調査隊を組織したハイデン (Ferdinand V. Hayden) が参加していたこと、および、最初の政府調査隊であった点で注目される。

また、1865年10月末にモンタナ準州知事代行ミーガー (Thomas Francis Meagher) ら一行が、ヘレナ (Helena) からベントン砦 (Fort Benton) までのピーガン (Piegan) 族との条約交渉のための旅行の途上吹雪に見舞われ、クッペンス (Father Francis Xavier Kuppens) という宣教師のミッションに投宿することになった。その際、同年春にインディアンの案内でイエローストーンを訪れた彼とその知人からイエローストーンの話を目にして、知事がその地域を連邦政府の公園として保留すべきであると言ったことが、1897年に出版されたクッペンスの記録に残されている。なお、この一行の中には、モンタナ準州判事ホスマー (H. L. Hosmer) や後にウォッシュバーン隊に加わった若い法律家ヘッジス (Cornelius Hedges) が含まれていた³¹⁾。

ここでの話に興味を抱いたミーガーは、1867年にイエローストーン調査隊を組織した。6月29日の新聞記事 (Virginia City Montana Post) には連絡担当者としてホスマー判事と後にウォッシュバーン隊に加わるエバーツ (T. C. Everts) が言及されている。しかし、ミーガーは出発予定日の前夜、ミズーリ川で水死し、その探検は立消えとなった。その後も調査の動きは1869年まで幾つかあったが、いずれも遂行されなかった。

(2) フォルサム-クック隊

そのような調査隊結成の動きを新聞で読み、興味を抱いたのがヘレナの近くのダイヤモンドシティ (Diamond City) に住むクック (Charles W. Cook) らであった。彼は1868年にイエローストーンの噂を目にして行ってみたいと考えたという。その年はすでに無理であったが、翌1869年7月29日の新聞 (Helena Weekly Herald) で探検隊を準備中であることが報じられていたので、参加するつもりで彼はヘレナに向かったものの誰も居なかった³²⁾。そのころ、インディアンと衝突が頻繁であったことに加えて、軍隊によるエスコートを断られたためヘレナの主催者は探検を中止していた。

しかし、戻ったクックは仕事仲間と同じクエーカー教徒の友人フォルサム (David E. Folsom) とピターソン (William Peterson) の3人だけで、行ってみることにした。3人は5頭の馬とともに9月6日にダイヤモンドシティを出発し、ボーズマン (Boseman) で食料などの最終準備を整え、イエローストーンを目指した。途中、1868年に入植したボトラー牧場 (Bottler Ranch) を経てイエローストーン川を遡り、9月13日に今日の公園域に足を踏み入れた。

彼らはイエローストーンの中心的部分をほとんど踏破し、10月11日にダイヤモンドシティに無事帰還したが、探検の話をして社会的信用を失うことを畏れてか、それほど積極的に広めなかった。しかし、フォルサムがヘレナに立ち寄った際に、ラングフォードは後にモンタナ準州知事となるハウザー (Samuel Thomas Hauser) とともにファーストナショナル銀行に知合を招いて、探検について講演してもらった。このフォルサムの話を聞いて、ラングフォードらは翌年の探検実現への意欲を燃やしたと記している³³⁾。

また、クラーク (Mr. Clark) という知合の勧めで、クックはフォルサムの記録と合せた原稿の出版を試みたが、ニューヨークトリビューン (New York Tribune) やスクリブナー誌 (Scribner's Monthly) などの著名な出版社は掲載を断った。ようやく1870年7月にシカゴの雑誌³⁴⁾に掲載され原稿料\$18を受取った。だが、その著者としてクックだけが記載され、内容も編集者によってかなり省略されたものであった。

一方、フォルサムは、モンタナ準州の公有地監督官ウォッシュバーン (Henry Dana Washburn) のもとで地図を作成していた技師デレシーにイエローストーン情報を提供した。これによってそれまで空白であった地熱活動が盛んなイエローストーン核心部が正確に表記された。この地図はフォルサムらが戻ってから僅か21日後の1869年11月1日に公表されている。この縁でフォルサムは1869年の冬から、デレシーのパートナーとなり、1875年まで地図作成を手伝った。当然ながら翌年のウォッシュバーン探検隊はこの地図を活用している³⁵⁾。無名であったためあまり評価されていないが、フォルサムらの得た情報量や内容から大掛かりなウォッシュバーンやハイデンらの隊よりも真の探検であったと言える。

なお、1922年に公園設置50年式典に招かれたクックは、マディソン分岐で探検最後のキャンプを設営した際、フォルサムとこの地域を政府が私有化を許すべきではないと論じたと伝えている³⁶⁾。これは後に広く流布したウォッシュバーン探検隊の物語と類似している。この公共的利用の提案を別にしても、雑誌への寄稿、地図の改善、翌年のウォッシュバーン隊への協力などの社会的影響がクックらの探検の成果としてあげられる。

(3) ウォシュバーン-ドーン隊

フォルサムらに先を越されたハウザーらの探検立案者は、これ以上実現を先に延ばせないと感じたのか翌1870年に準備を整えた。そのメンバーにはウォシュバーンを初めとしたモンタナ準州の有力者たちが含まれていた。その中でも初代の園長となったラングフォードとモンタナまで路線を延長しようとしていたノザンパシフィック鉄道会社(Northern Pacific Railroad, 以下NPRRと略す)関係について議論が多い。

1864年7月2日にNPRRは北西部の鉄道敷設権を与えられたものの何も具体化しなかったが、その期限切れが1870年に迫り、ジェイ・クック(Jay Cooke)の投資会社に援助を求めた。それを引受けたジェイ・クックはミネソタ州知事マーシャル(William R. Marshall, 在任期間1866-70)に協力を求め、70年2月5日にミネソタで工事を開始し、鉄道債と鉄道会社へ付与された沿線の土地の売却を促進するため、鉄道通過予定地域を宣伝する必要に迫られていた³⁹⁾。

一方、マーシャルの義弟がラングフォードであったため、ラングフォードはモンタナの徴税官の仕事や知事候補となっていたが、政権交代で徴税官の職を失い、準州の知事任命も受けることができなかった。ここで、モンタナに詳しくイエローストーンの調査を計画していた無職のラングフォードとジェイ・クックの利害は一致する。

ラングフォードは1870年3月18日にニューヨークのNPRRの事務所に現れている。さらに、6月4日と5日にはジェイ・クックにも会っている。その後、彼はセントポール(St. Paul)でモンタナを管轄するハンコック少将(Maj. Gen. Winfield Hancock)に探検協力を要請し、7月27日にヘレナに戻り、8月1日には調査隊の派遣が具体的になったと記録している。

ここで注目すべきことは、探検が計画されていることを聞き知った、後に2代目園長となる、ノリス(Philetus W. Norris)⁴⁰⁾がヘレナで参加を求めていることである。彼はいくら待っても探検隊の準備が整わないので単身イエローストーンを目指した。途中のボトラー牧場で場主フレデリック(Frederick Bottler)を加えて、2人でイエローストーン川を遡ったが、フレデリックの怪我によってノリスの試みは中断した。彼が8月1日にヘレナにもどった際にも探検隊が出る様子はなかったのが、最新の情報を知人のエバーツに伝えてから、測量の仕事のためミズーラ(Missoula)に去った。このように、熱心なノリスが調査隊派遣は当然無理と諦めるような状況であったのに、ラングフォードの帰還後数日で突然具体化したという事実は、NPRR関係者とラングフォードの間の取り引きの存在を想像させる。

隊長となるウォシュバーンは8月9日にイエローストーンにもっとも近いエリス砦のドーン(Gustavus C.

Doane)中尉に探検隊の護衛を要請し、さらにセントポールのハンコック將軍にも電報を打ち、約束したエスコートを依頼している。その許可は8月14日にエリス砦に伝えられ、それを受けて17日に探検隊はヘレナを発った。8月初めには約20名が参加する予定であったが、クロウ族が攻撃的になっていたため辞退者が出て9名となった。なお、ヘレナ出発の前夜、ウォシュバーンはフォルサムと面談してイエローストーンの情報と直接得ている。その際にも、フォルサムはイエローストーンを公共の目的に利用することも提案している⁴¹⁾。

22日には、護衛部隊を加えてエリス砦を出発した。最終的なメンバーは9人の隊員と2人の荷役夫、2人の黒人コック、護衛に当たったドーン中尉に率いられた5名の騎兵、総勢19名と40頭の馬とロバからなる一団であった。9名の隊員といっても、ジレット(Warren Caleb Gillette)を除いて野外での活動経験がほとんどなく、きまぐれで加わった人間も含むにわか仕立の隊であった。南北戦争で活躍したウォシュバーンは、戦後下院議員を勤めたが、結核に侵された体の回復を期待してモンタナ準州の公有地監督官(Surveyor General)の職を求めた。西部へ憧れていたノリスも同じ職を求めたが、1869年4月17日にウォシュバーンが任命され、その夏にヘレナに赴任した。この気晴らしの冒険旅行的な隊に軍の護衛が付いたのは彼の政治力によるものであろう。なおモンタナ赴任以前から体調が優れなかった彼は、探検から戻ると、風邪をこじらせ4ヶ月後の翌年1月に死亡した。このため公園設置運動には関わらなかったと考えられる。

ハーバード大学出身の法律家ヘッジスは地元の新聞(Helena Herald)と特派員契約を結んでいた。途中で遭難したにもかかわらず37日後に奇跡的に発見されたエバーツはモンタナ準州の国税庁評価官(assessor of internal revenue)であったが、ラングフォードと同様、新大統領の就任にともない職を失っていた。トランブル(Walter Trumbull)はエバーツの部下で、彼も同様に職を失いパケーションとして参加したにすぎない。彼の父親がイリノイ選出の上院議員でNPRRの支持者であったこと、および、後に彼自身が新聞の特派員として国立公園設立法案を提出したクラゲット(William H. Claiborne)下院議員に付添っていたことから、彼の国立公園運動への影響が言われるが、羊の放牧地にすることを雑誌の中で提案している程度であった⁴²⁾。商人であるジレットはドーンらを除けば一番野外活動に長け、エバーツの捜索が打切られてからも2名の騎兵と共にしばらく捜索活動を続けた。

隊員ではないが、ドーンはこの探検の公式記録⁴³⁾を残し、それが公園設置運動において議会にも回覧されている。また、トランブルと彼の部下ムーア(Charles Moor)はイエローストーンのスケッチを残し、後に画家モラン

(Thomas Moran) がそれらに手を加えて、ラングフォードのスクリブナー誌の記事に添えられた³⁹⁾。これが縁となってモランは翌年のハイデン調査隊に同行することになった。

一行は、フォルサムのアドバイスに従って変更した部分以外はほとんどフォルサム-クック隊のルートを辿り、9月23日にバージニアシティに到着した。ドーンらは24日にエリス砦に戻り、その他の者はエバーツを捜索していたジレットらを除き、27日までにヘレナに戻った。このように探検とも調査とも呼べない内容の隊であったが、ヘレナの有力者を含み、新聞や雑誌で彼らの活動が頻繁に報道されることによってパブリシティが増加した。そのことはフォルサムらの報告をフィクションとして掲載を拒否したスクリブナー社がラングフォードの記録を1871年の5、6月号に掲載したことからも明らかである。

さらに、\$600の賞金を目指してエバーツ捜索に出かけたパロネット (Collins Jack Baronett) らが、10月16日に極度に衰弱した彼を発見した。10月21日にはそのニュースが掲載された。それまでのウォッシュバーン隊の記事が地元の新聞中心の報道であったのに対して、このニュースは全国的な関心を惹起した。エバーツは野外活動の経験に乏しいため仲間からはぐれたに過ぎないにもかかわらず、スクリブナー誌に遭難記³⁸⁾を掲載し、公園設置後は初代の園長として推薦されるほどの時の人となった。

ラングフォード³⁹⁾やウォッシュバーン⁴⁰⁾の記録がすぐに地元の新聞に掲載されたのに続いてジレットの記録も載った⁴¹⁾。その中で彼らが出合った怪しげな白人について記されている。この記録からも、当時金採鉱師や馬泥棒のような犯罪者など、イエローストーン地域に出入りしていた人間が少なからずいたことが読み取れる。一方、ヘッジスは10月6日から11月9日まで地元紙 (Helena Herald) に掲載を始めた。その中で注目されるのは11月9日の「イエローストーン湖」という題の記事⁴²⁾で、イエローストーン地域をモンタナ準州に編入し、公共の利用に用いることを提案している点である。法律家の彼は当然ながら1864年のヨセミテグラントを承知の上で、イエローストーンに対しても同様な措置を求めていると考えられる⁴³⁾。

その頃、ラングフォードは6週間を費やして、講演のための原稿を作成していた。東部で20回講演するというのがジェイ・クック事務所との契約であったが、それに先立って、地元のヘレナで11月18日に、バージニアシティで11月22日に講演会を開催している。その後東部に発ったラングフォードは、1月19日に首都ワシントンのリンカーンホールで大聴衆を集めた。その際、ハイデン隊の調査予算を配当した有力下院議員でNPRRの支持者のブレイン (James G. Blaine) がラングフォードをハ

イデンを含む聴衆に紹介している⁴⁴⁾。

1月21日にはニューヨークでも同様の講演会が催されている。この講演後、彼は体調を崩し、ニューヨーク州ユティカ (Utica) の実家で静養しながら、ジェイ・クックやNPRR関係者と手紙を取交わしたり、スクリブナー誌に掲載⁴⁵⁾⁴⁶⁾する探検記の原稿執筆を行なっている。その間、5月中旬にはフィラデルフィアのジェイ・クックの私邸でも講演している。

この探検隊の目的としてウォッシュバーンは正確な地図の作成をあげ、ドーンらを派遣したハンコック少将も地図の作成を指示しているが、増大するパブリシティの割には、この探検隊によって改善された部分はほとんどなかった。ウォッシュバーン隊の得た情報は、地名を付けた以外に新しいものはなかった。

(4) ハイデナーバーロウ調査隊

1829年生のハイデン⁴⁷⁾は医学を専攻したが地質調査に情熱を注ぎ、ペンシルベニア大学の地質・鉱物学の教授となっても、ほとんどの西部の調査に費やしていた。1859年のレイノルズ隊のメンバーでもあった彼は、ワシントンでのラングフォードの講演を聴いてから、調査隊派遣計画書を作成した。彼がマサチューセッツ出身の上院議員で予算委員長のドウズ (Henry M. Dawes) や後に委員長となるブレインなどの有力議員と親しかったためか、1871年3月3日に\$40,000の予算が配当された上、彼の年俸が\$3,000から\$4,000になり、メンバーの人事権も与えられた。さらに、1869年に大陸横断ルートを作成させていたユニオンパシフィック (Union Pacific) およびセントラルパシフィック (Central Pacific) 鉄道は、調査隊員と調査器具を集合地点となったユタ州オグデン (Ogden) まで無料で輸送した⁴⁸⁾。

隊員には気象、植物、動物、岩石、医学などの専門家に加えて、調査予算を通過させたドウズ議員の息子や画家エリオット、写真家のジャクソン (William H. Jackson) など19名からなっていた。さらに、ゲストとしてラングフォードが掲載した記事の挿絵を担当したモランが加わった。これには6月7日と16日付けのジェイ・クックの秘書ネットleton (Nettleton) からハイデンに宛てた彼の参加を要請する手紙が残されている。彼は絵を担保にした借金\$500とジェイ・クックから提供された\$500で参加費用を調達した⁴⁹⁾。

メンバーに加えて荷役夫や料理人、猟師、案内人など20名が加わった一行は6月11日にオグデンを引き払い、バージニアシティを経由してクック隊やウォッシュバーン隊も利用したエリス砦に到着する。ここで、ドーンの報告に興味を抱いたシェリダン (Philip H. Sheridan) 中將がシカゴから派遣したバーロウ (John Whitney Barlow) 大尉率いる写真家も含む5名からなる工兵部隊も6人の荷役夫とともに加わった。さらに、この両隊

のエスコートとしてテイラー大尉 (Capt. Taylor) 率いる騎兵中隊が加わり総勢60名以上からなる大調査隊となった。ハイデン隊は7月15日、バーロウ隊は翌日に出発したが、途中前後しながら似たようなルートを取り、8月末から9月初めにかけてエリス砦に戻っている。当初、ハイデン隊はスネーク川のある南側に抜けてオグデンに戻るつもりであった。これはモンタナ側のNPRRとユタ側のセントラルパシフィックを結ぶルートの可能性調査でもあったが、予期せずバーロウ隊と一緒に行動することになり、予定を変更している。

この頃にはマンモスホットスプリングス (Mammoth Hot Springs) にすでに温泉の利権を目指してマッカートニー (James C. McCartney) らが小屋を営業していた。また、イエローストーン川には前年にエバーツを救出したバロネットによって有料の橋が掛けられ、調査隊も利用している。

この2隊はイエローストーンに関する莫大な情報を持ち帰ったが、バーロウ隊の調査資料は同年10月8～10日のシカゴの大火によって写真も含め多くが消失した。ハイデン隊は500ページに及ぶ報告書と400枚の写真を残したが、報告書の刊行は公園設置後となった。

4. 国立公園設立運動

ハイデンがワシントンに戻ると10月27日付けでジェイ・クックの秘書ネットルトンから手紙が届いていた。それはケリー判事 (William Darrah Kelly) がイエローストーンを公園とすることを提案したので、ハイデンの調査報告書の中で公園化支持を提案して欲しいという内容であった。それを受けてハイデンは、報告書の中で公園化を提案するとともにNPRRの延長を支持した。なお手紙で言及されたケリーはペンシルベニア選出のベテラン共和党下院議員で、鉄道支持派であった⁵⁰⁾。

一方、ほぼ同時期の11月2日、ラングフォードもNPRRの件でミネソタに向かっている。すなわち、NPRRはワシントンのハイデンとモンタナのラングフォードを国立公園設置運動のプロモーターとして、議会工作を進めた。この時点で初めて、イエローストーンの宣伝を進めてきたNPRRが、国立公園と言う目標を明確にさせたことになる。この時から突如としてイエローストーンを国立公園とする運動が始まる。

(1) 国立公園設立提案者

イエローストーンの私有化を防ぐ手立ての必要性に関する言及として、まず、1865年に宣教師クッペンの話を聞いたミーガーのものがあげられる。第2に1869年にフォルサムらが探検中に抱き、戻ってからヘレナでウォシュバーンに伝えたと言うもの。第3に、ヘッジスが1870年9月19日に探検最後のキャンプ地で提案したとラングフォードの日記に記されたもの、および同年11月に新聞に掲

載されたモンタナの保留地設置の提案があげられる。第4に、1871年10月に調査から戻ったハイデンに届いていたネットルトンの手紙の中でケリー判事の提案として言及されている。

しかしながら、それぞれを検討してみると、まず、ミーガーの提案に関しては同行のヘッジスの日記では触れていない上、その提案を記録したクッペンスの資料は32年後1897年に出版されたものだ。またフォルサムの提案はクックが1922年に語ったものである。後に検討する有名になったヘッジスの提案も1905年に出版されたラングフォードの日記に記されたもので矛盾だらけだ。さらに、ケリー判事がネットルトンに提案したというのもネットルトンの手紙の中の引用だけでケリー自身の記録がない。このようにいずれも随分後になって公表されたり、間接的なものであるので信頼性に問題がある。

この中でどれが本当であるかの詮索にはそれほどの意味がなかろう。なぜならば、1864年のヨセミテ移管の件は既に広く知られていて、モンタナ準州初の新聞としてバージニアシティで刊行された Montana Post の1866年7月14日の記事にヨセミテよりもイエローストーンの方がすばらしいと記されている⁵¹⁾。さらに、1872年2月のスクリブナー誌の中でハイデンはヨセミテに対するイエローストーンの優越性を述べ、上院での審議でもヨセミテの問題に触れられている。このようにヨセミテの設立の事例は知識人の間では知られていたことなので、それをイエローストーンにも当てはめること自体は、それほど特筆に値しない。むしろそのような考えを法律によって具体化させていった過程が重要である。そこで、なぜ州ではなく連邦政府の管轄とする法案となったのか検証する。

(2) 法案提出

イエローストーンの大部分は、ワイオミングに属するが、その探検は主としてモンタナ側より遂行され、公園設立運動もモンタナの人々によって推進されていた。前述したようにモンタナ在住の法律家であったヘッジスは、ワイオミングに属している地域の水系がモンタナ側に流出しているから、分水嶺までモンタナに編入すべきであると考えた。すなわち、彼が描いていたのはヨセミテのように州の管理する公園であった。このため、地元モンタナの新聞や、議会における審議でも、ヨセミテの前例にならって州に移管すべきだという考えが出されている。

ところが、州立公園にするためには、イエローストーン地域の大半を占めるワイオミングもモンタナもまだ行政基盤の弱い準州 (territory) であった。アクセスの関係でモンタナ準州民が探検の中心となり公園設置運動への関心も高かったにもかかわらず、その地域の多くがワイオミングであったことがモンタナ準州民の不満であった。しかし、ワイオミングの領地をモンタナに移管しよ

うとすればワイオミング住民が猛反対することが予想されるため現実的ではない⁵²⁾。さらに、前例となったヨセミテがひどい管理状態であることも知られていた。これらの理由によって、イエローストーンは連邦政府が管理する土地のまま、ホームステッド法 (Homestead Act) の適用による私有化を防止するために保留地とする以外に方法がなかったと言える。

議会での立法化についても、誰が最初に提案したのかという点に関する議論があり、自分が中心であったと述べた人の記録がいくつか残されている⁵³⁾。しかし、債券を捌く必要に迫られたジェイ・クックが PR (public relations) ということばを今日的に使った最初の人間であると言われていることから⁵⁴⁾、NPRRがイエローストーンの宣伝の延長として、鉄道建設支持議員やラングフォード、ハイデンを動かして国立公園化推進を進めたのは明らかである。ゆえに、特定の個人が働きかけたのではなく、彼らが協力して法案を作成したというのが妥当である⁵⁵⁾。

ハイデンがネットルトンからの手紙を受け取ってから2ヶ月足らずの1871年12月18日に公園設置法案は公有地委員会の委員長でもあるポメロイ (Samuel Clark Pomeroy) 上院議員によって上院 (S392) に、モンタナ選出のクラゲット下院議員によって下院 (HR764) に同時に提出された。その法案は1864年のヨセミテ移管法を下敷として、その範囲などの地理的な部分はハイデンが執筆したと言われている。

(3) 運動の展開

議会での支持を得るために、ラングフォードはドーン の公式報告書と自分のスクリブナー誌の記事を議員全員に配付した。一方、ハイデンは調査で採取した鉱物見本や写真・スケッチを議事堂内に展示し、焼き増しされた写真は配付された。さらに、12月にはエバーツの遭難記もスクリブナー誌に掲載され、法案成立の直前の2月には、公園設置を訴える内容を盛り込んだハイデンの記事も同誌に掲載された。これらの中で一番威力を発揮したのが、ジャクソンが撮影した写真⁵⁶⁾⁵⁷⁾とモラン⁵⁸⁾⁵⁹⁾のスケッチであった。とりわけ短期間に大量の複製が容易な写真が効果的であった。

屋内でも写真の作成が困難であった当時に400ポンドにも及ぶ器材を携行してその場で現像を行ったジャクソンの技術、体力、精神力はずば抜けたものであった。そのことはイエローストーン探検後もハイデン隊のメンバーとして西部の写真を撮り続け、元気に長寿を全うしたことからも明らかである⁶⁰⁾。また、彼の写真は作品として構図が優れていただけでなく、スケールとして人物を挿入することによって科学性も考慮されている。

これに対して、直後はスケッチの展示で対応したモランも、ジェイ・クックのために水彩画のセットを作成し、

図-1 モラン作イエローストーン大渓谷
(Grand Canyon of the Yellowstone by Moran, 1871)

これが後に石版印刷され、ハイデン調査隊の記録とともに出版された⁶¹⁾。さらに、1872年にはイエローストーン溪谷の大作 (7x12feet) (図-1) が\$10,000で連邦政府によって購入された上、議事堂に展示されたので一躍有名となった⁶²⁾。この調査を機に2人は親交を深め、ジャクソンはモランから構図のアドバイスを受け、モランはジャクソンの写真を元に絵画を作成し、2人ともその後西部の大自然を対象とした。

このように滝や間欠泉などを対象とする写真と絵画が公園設置運動において一番威力を発揮したことは、モニュメントとしての景観が何よりも重視されたことを物語る。また、債券販売と沿線の土地売却を目的とするNPRRの主導で進められた設置運動は、主として議会の中、せいぜいスクリブナー誌などを購読する東部の知的エリートたちに限定されたものであり、債券を購入することのない一般大衆にとっては全く関わりのない出来事であった。たとえば、地元ヘレナの新聞 (Rocky Mountain Gazette) には、むしろ開発から除外されることによって、この地域が発展から取り残されることを危惧する記事も残されている⁶³⁾。

(4) 議会での審議

上院では1872年1月22日に一旦公有地委員会から本会議に報告されたが撤回され、1月30日に審議が行なわれた。その際、カリフォルニア選出で上院予算委員会委員長のコール (Cornelius Cole) 上院議員が、ロッキー山中には他にも充分な公園適地があるとして、広大な面積を開拓から除外して公園とすることに意味がないという意見を表明した。これに対して、まず、公園を支持するバーモント選出のエドムズ (George F. Edmunds) 議員が標高と緯度の見地から農耕に不適であることを説明したが、コール議員はそれならば利用者もいないから公園として保全する必要がないと反論した。今度は、ウォシュバーン探検隊のメンバーの父親でもあるトランブル (Lyman Trumbull) 上院議員が、コール議員の出身地であるヨセミテ溪谷の私有地での通行料徴収の問題を

示し、開拓不適なイエローストーンも、近いうちに景勝地の展望を私有化され同様の問題が発生する可能性があるとして示唆した。さらに、将来必要となればこの法律は無効にできるという考えも示した⁶⁴⁾。コール議員も反対ではなく必要性を感じられないという消極的な意見であったので、上院では採決せずにこの法案は通過した。

一方、下院において公園法案を受け取った公有地委員会は、1月29日にハイデンの報告に基づき設立を支持するレポートを作成したまま放置した。さらに、2月27日には上院を通過した法案が、下院に回されてきた。この上院からの法案も委員会に審議が付託されそうになった時、下院の最有力者で、ハイデン隊の支持者でもあったドウズ議員がすぐに通過させることを求めた。この時のドウズ議員による賛成理由の説明においても、8年前に彼が支持したヨセミテ移管の前例を紹介してから、イエローストーンのすばらしい景色の保護を求めた。さらに、入植・農耕不適であるが、もし適地があれば入植も可能だと示唆した。また、スー族の保留地との関わりに関する質問が出されたものの、審議過程では反対意見はなかった。さらに、NPRRの本拠地ミネソタ選出で公有地委員会委員長ダンネル(Mark H. Dunnell)議員らが両院の法案支持を表明し、採決の結果、賛成115、反対65、棄権60で、1872年2月28日に成立し、3月1日にイエローストーン公園法としてグラント(Ulysses S. Grant)大統領によって署名され発効した。全体として共和党が賛成し、民主党が反対していた。

その法には私有化禁止に続いて、“set apart as a public park or pleasureing-ground for the benefit and enjoyment of the people”という目的が規定された。さらに、木材、鉱物、景観(natural curiosities, or wonders)の破壊防止と自然状態の保持、魚類と動物の乱獲と商業目的の利用禁止が規定された。

その内容には1864年のヨセミテの州への移管による公園化を認めるヨセミテグラントから転用された部分が多く、違いは管理者が州政府か連邦政府かという点のみである。この法は“Yellowstone Park Act”と呼ばれ、“national park”という言葉は表われない。イエローストーンは1872年に「国立公園」に、ヨセミテは1864年に「州立公園」に、さらに1890年に「国立公園」になったと記述した文献が多いが、イエローストーンにしてもヨセミテにしても、それぞれの設立法案には“national park”や“state park”の文字は見当たらない。ただ、“reserve”とか“set aside”という表現で公有地としての保留を、“public park”という表現で公園化を宣言しているだけである。“national park”が初めて使われたのは公園法案が審議中の1872年1月1日の新聞の中であり、“Yellowstone National Park”という言

葉は内務長官がラングフォードに宛てた園長受諾を要請する手紙の中であった⁶⁵⁾。さらに、法律においては2番目の国立公園として1875年に設立されたマキノ国立公園設置法で“national park”という言葉が初めて使用された⁶⁶⁾。

当時はまだ国有林も、それを管理する森林局も存在しなかったため、イエローストーンの所管は、1849年に設立され、他の省に当てはまらない仕事をすべて引受けていたなんでも屋の内務省となり、責任者は内務長官となった。設置法では不法占拠の禁止が規定され、内務長官が規則を制定できるとなっていた。これにもとづいて、シュルツ(Carl Schurz)内務長官の時代の1877年に規則が制定された。それによると管理人などの住民や利用者のレクリエーションおよび食料供給目的以外の狩猟や釣、その獲物の売買が禁止された。また、木石の無許可採取、不要な焚き火とその放置も禁止されている。換言すれば管理人や公園を訪れることができた小数の裕福な観光客であれば、狩猟の制限がないという意味であった。また、獲物がレクリエーションのためかそれを売るためかの判断は困難であるから、近隣住民の密猟も事実上野放しであった。さらに、違反者に対する罰則規定も、違反者を逮捕する管理体制もなかったため、机上だけの規定であった。そのため、設立後も確固たる管理組織のない放置状態が44年も続いた。さらに、1916年の国立公園局設置後は観光利用優先の時代となった。

5. 公園「管理」の開始

国立公園の設置が自然環境の保護と民衆の利用を目指す先見的なものであると言う公園運動の理想化が、非現実的であったという証として初期の「管理」を検証する。

(1) ラングフォード時代

初代園長候補として遭難から37日後に救出されたことで全国的に有名になったエバーツが推薦されたが、その際の救済者にも謝礼を払わなかったほど金銭に厳しい商人であった彼は無給の園長職を断った⁶⁷⁾。そこで、イエローストーン公園化推進者のラングフォード宛てに、初代園長を引き受けることを要請する内務長官からの手紙が1872年5月10日に届き、彼は10日後承諾の返事を出した。その中で既に小さなホテルが建てられていることや法外な通行料を請求する道路ができているのでその規制が必要であることが述べられている。

丁度その夏、ハイデンが南北2隊からなる調査隊を再びイエローストーンに派遣することになったので、ラングフォードはゲストとして南隊に加わるようになった。その際、彼は6月29日にグランドテトン(Grand Teton)山を初登頂したと言われるが、矛盾が指摘されている。このような点からもラングフォードの誇張癖が感じられる。また、この北隊がマンモスホットスプリングスに到

着するとリュウマチなどの慢性病の温泉治療のため50人ほどの老若男女がマッカートニー小屋の周囲でキャンプしていたと言う⁶⁸⁾。この調査後に内務長官に提出した彼の唯一の報告書の中で、園内での商業活動の規制、野生動物や森林の保護を訴えるとともに、アクセス改善のため道路建設費\$1,500を求めている。

銀行検査官として生計を立てていた彼自身にそれほど資産があるわけではなかったのが、公園を訪れたのはこのときと1874年8月の2回だけのものである。1874年の訪問の際には公式記録は残していないが、公園境界測量と道路建設のため\$10,000の予算配当を求めている。彼は当初委託業者からの収入で管理費がまかなえると考えていたようだ⁶⁹⁾。しかし、内務長官には園内での道路、宿泊施設、売店、製材所の建設の要求があったが、ラングフォードはすべて却下していた。これはNPRR以外による委託を排除したいと言う気持ちの反映かもしれない。

無給では仕方がないとはいえ、イエローストーン宣伝に賭けた彼の情熱と園長になってからの無関心さの対比は、彼が期待していたNPRRの延長にともなう観光開発が、1873年の恐慌によるジェイ・クック事務所の倒産によって延期されたことにも関係していよう。同年11月、鉄道延長に伴うリース収入による管理費が得られず荒廃する状況を憂慮したハイデンも、政府に管理予算と園長に警察権を与えることを求める手紙を出している⁷⁰⁾。なお、NPRRの敷設は1879年に再開され、1882年秋にイエローストーンに近い町まで延びた。

広大な地域に管理予算も人員もない状態であったので密猟者が跋扈しただけではなく、間欠泉等の岩石や野生動物の角等を土産物として採取する訪問者が跡を断たなかった。このため、地元住民およびイエローストーンを訪れた人々から管理不在に対する批判が高まった⁷¹⁾。特に1975年夏には、ベルクナップ (Belknap) 陸軍長官一行がドーン中尉のガイドで視察に訪れ、ルドロー (Captain William Ludlow) の率いる工兵隊も調査に訪れている。間欠泉などの破壊や野生動物の虐殺を見て、ルドローは報告の中で初めて軍隊による管理を提案している⁷²⁾。

1877年4月18日までの5年間の在任期間におけるラングフォードの活動としては、彼のアシスタントとなったフォルサムを通じて得た情報に基づき、園内の破壊行為や密漁問題を報告している程度である⁷³⁾。

(2) ノリス時代

1821年生まれで、若いときには猟師として生計を立てていた経歴を持つノリスは、新聞、デトロイト郊外の宅地開発などの事業で成功してから後も西部へのロマンを抱き続け、1869年にはモンタナ準州知事の職をウォシュバーンと争ったり、1870年には途中までイエロースト

ンに足を踏み入れるほどであった。さらに1875年にはスミソニアン研究所の要請でイエローストーンで地質などの資料の採取を行っている。そのような彼がラングフォードの管理に対する不満を背景として、1877年4月18日に遂に内務長官からイエローストーンの園長に任命され、自分の夢であるウィルダネスへの憧れを満たす機会を得た。

さっそく1877年6月に赴任したものの、シャーマン (Sherman) 将軍一行に同行した際の落馬による怪我のため自宅に戻ることになった。これは同年8月末に騎兵隊に追われたネスパーズ (Nes Perce) 族がイエローストーン内を通過する際に、観光客らも巻き込まれ死傷者が出る事件が発生したことを考えれば、不幸中の幸いであろう。

翌1878年から実際に園長として活躍し、最初の管理予算\$10,000を獲得している⁷⁴⁾。前年のインディアンの事件を意識した彼はまず、昔のような管理事務所をマンモスホットスプリングスに建設するとともに、間欠泉地域を結ぶ馬車道の開設に着手した。また、インタープリテーションのはしりとして、自分の印刷会社で500部の利用規則を作成し園内各所に掲示した⁷⁵⁾。この点、初代園長でありながらほとんど公園を訪れなかったラングフォードとは異なり、ノリスは公園に駐在して管理を直接行うことができた。

1882年2月2日まで5年間の園長在任期間中に、人件費や道路建設予算も付けられた。その予算配当総額は\$53,425.17で、その中から彼自身の給料などの人件費と道路建設費を賄ない、153マイルの馬車道と204マイルの歩道を建設している⁷⁶⁾。また、気象観測や間欠泉の噴出の記録も残り、密漁による野生動物の減少を防ぐために初めて動物管理人 (game keeper) も任命している。また、先住民の住居跡などの歴史にも関心を抱き、スミソニアンに資料を送っている⁷⁷⁾。

不況を脱した1879年にはNPRRの鉄道建設が再開され、激化した公園内の利権争いに巻き込まれた彼は、1882年3月31日にコンガー (Patrick Henry Conger) に代わられた。

(3) 猟官制による荒廃と軍隊の導入

ノリスに続いてコンガー (在任期間1882.4.1-1884.9.9)、カーペンター (Robert Emmett Carpenter, 同1884.9.10-1885.6.30) の2人が園長となったが、猟官制の結果として公園の意義を理解せずに、その地位を私腹を肥すことに利用したので、公園の荒廃が一層進んだ。特にイエローストーン公園改良会社 (Yellowstone Park Improvement Company) が権益を独占し、園内に製材所を設けてマンモスホットスプリングスにホテル (National Hotel) の建設を進め、宿泊客には園内の野生動物の肉が出されるほどであった⁷⁸⁾。

1877年に続いて、1881年にも公園を訪れたシェリダン将軍は野生動物の減少を見て、狩猟家の組織を通じて公園の拡張と保全を訴えるとともに、軍隊による管理を示唆した。また、同年12月には議会でもベスト（George Graham Vest）上院議員がイエローストーンの荒廃とその管理の問題を取上げ、管理法案を提出した。この法案は成立しなかったが、1884年度の予算法案の中に、その意図が盛り込まれた。すなわち、内務長官の園内リース許可権の制限、内務長官の要請があれば陸軍長官はイエローストーンに軍隊を派遣できること、園長の年俸\$4,200、10名のアシスタントの年俸\$900などが1883年に規定された。

さらに1884年3月6日から、公園内のワイオミング地域にはワイオミング法が適用されることになり、園内に2名の判事と2名の警官が配置されることになった。これによって密漁や焚き火の放置、岩石など採取行為は減少したが、その規定では罰金の半額が彼らに与えられることになったので罰金目当ての逮捕が生じ、評判を落とした。結局、その法は1886年3月10日に削除された⁷⁹⁾。

2人の後を引き継いだウェア（David Walker Wear、同1885.7.1-1886.8.20）は公園管理の建て直しに尽力したが時既に遅く、1886年7月1日から執行される1887年度予算案でイエローストーンの管理予算が削除された。この際、連邦政府がショービジネスに関与すべきではないと言う公園廃止意見も出された。また、ヨセミテとマキノーの前例が引用され、イエローストーンも州に移管すべきであると言う意見も出た。管理人の件費が削除された時点で、内務長官は陸軍長官に、1883年の規定にもとづく軍隊の派遣を要請した⁸⁰⁾⁸¹⁾⁸²⁾。かくしてハリス（Moses Harris）率いる騎兵隊による管理が始まった。

これに関しては、2番目の国立公園として1875年3月3日に設置され、軍の管理のもとにあったマキノーの前例の存在が重要である。ミシガン州選出のフェリー上院議員が1873年にマキノー国立公園設立運動を展開した際に、それを支持したベルクナップ陸軍長官がイエローストーンを1875年夏に訪れ、狩猟や釣を楽しむとともに、その管理の問題を指摘している⁸³⁾⁸⁴⁾。すなわち、彼は軍によるマキノー国立公園の管理に関わっていたから、この訪問が後にイエローストーンへの軍隊の派遣を決定する端緒となっていると言える。

駐軍も罰則規定がないため密猟者を公園境界の外に追放する以外に手立てがなかったが、ようやく1894年にレーシー法と呼ばれる罰則規定のある鳥獣保護法が制定された。1891年には隣接地域に保護林が設立され一種のバッファゾーン的な機能を果たすことになった。

軍隊の管理は1916年に公園局が設立され、1918年に実質的に移管されるまで続いた。その際、希望者がレンジャーとして公園管理を継続した。公園局設立後、最初の

園長が1919年に赴任したオルブライト（Horace M. Albright）であった。

このように設立されたものの管理が放置される状態が長く続いたこと自体が当時の国立公園と言うものの社会的認識を物語っている。

6. 成立背景に関する議論

以上、トラッパーの時代から調査隊の派遣を経て、公園法成立過程、および初期の管理実態を検証した。これらの事実を踏まえて、公園成立背景に関して議論を進める。アーリー⁸⁵⁾は6つの要因をあげ、議会での審議ではロマン主義の影響が強いことを示唆している。それらを再検討すると、イエローストーンはモニュメント性と資源価値の欠如という2つの要件から保留地化が提案され、それを鉄道の経済効果を期待する議員が支持することによって公園となった。

(1) モニュメンタリズムの認識

初期のトラッパーたちからラングフォードの記録に至るまでイエローストーンの説明にはロマン主義が反映されている。その意識は、開拓が進むに従って消失するフロンティアに対するノスタルジーによって増幅された。さらに、ロマンをかき立てるこれらの間欠泉や渓谷の景観が、アイスランドやスイスのものより優れているという優越性を誇示する表現が新聞や議会でも頻繁に出てくることから、ヨーロッパの歴史や文化に匹敵するものであるというナショナリズムの意識が感じられる⁸⁶⁾。

ヨーロッパに対して劣等感を抱いていたアメリカ人にとって、自国に誇れるものを見つけたことは重要であり、それらを保護することを考えた。すばやく保留地としないと、ナショナリズムの対象が入植者たちによって私有地化され、有料になってしまうという危惧の念が表明された。これはナイアグラの展望地がほとんど有料化され、その俗悪さがヨーロッパ人旅行者から厳しく批判され、アメリカの知識人たちが恥じていたこととも関係する。さらに、1872年の時点でヨセミテでもすでに入植した人々による有料化した道路など州による管理の問題が明らかになっていった⁸⁷⁾。同様に、ハイデン隊が調査に訪れたとき既に、地域内で小屋や有料橋を営業している人々がいたので、すばやく立法化を望んだのであろう。法案成立直後に掲載された、鉄道によるアクセス改善によって質の高い文化人のリゾートとなることを期待している内容のニューヨークタイムズの記事⁸⁸⁾が公園設置の真意として読み取れる。

法案がわずか2ヶ月半で成立していることはハンプトン⁸⁹⁾が調査した国立公園法案成立所要期間の平均10年以上に比べると極めて短期間である。イセ⁹⁰⁾はこの法案が成立したのは奇跡に近いとして、その成立理由としてあまりにも僻地であるので酪農や木材産業などの政治力が

及ばなかったからだと述べている。確かにロッキー山中に取り残された空間として実際に知っている人間は限られていたため一部を除きほとんど無関心であったことに加えて、有力政治家が支持し、次に述べる資源のない場所であることを訴えたからであろう。

なお、大西洋を挟みヨーロッパに面した東部の人々にとってはナショナリズムであったが、開拓時代を迎えていたモンタナの人々にとってはニューヨークのナイアガラ、カリフォルニアのヨセミテをしのぐ景観としてリージョナリズムの発露の場となった。これはモンタナの新聞ではヘッジスらがイエローストーンのモンタナへの移管を求めていることから理解できる。

写真と絵画が国立公園設置にもっとも効果的であったということも、多くの人々がその要件を珍奇な現象やモニュメントとしての価値から見ていたことを説明する。モニュメント性の典型的なものとしては1873年に調査されたホーリークロス (Holy Cross)⁹¹⁾ があげられる。ロッキー山中に雪で浮き彫りになる十字架を頂く山があるという噂は知られていたが、イエローストーンの場合と同様、ハイデンが調査に出向き、ジャクソンが撮影に成功し、モラン⁹²⁾も現地を訪れ絵画を完成させて以来、人口に膾炙し、巡礼も出るほどになった。

さらに、管理費が計上されないだけではなく、管理体制も放置された事実もモニュメント性を物語る。所有に関わらず間欠泉は残るとコール議員が述べたように、モニュメントとして認識されていたが故に予算を組んで管理する必要を感じなかったのであろう。

(2) 資源価値の認識

このようにモニュメンタリズムが評価されても、土地払い下げによる開拓最優先の時代にその対象からはずすという言葉は時代錯誤的法律を制定するためには、そこが開拓には適さない無価値の土地であることを議会で納得させる必要があった。そこで、農耕牧畜には不適で、火山性起源のため天然資源も乏しいと言うことが力説された。さらに、まだ入植地が存在しないこと、インディアンの居留地もないことなども言及された。

実際、当時は野生動物も少ない土地であった。そのことは探検隊が訪れた当時には動物が希であったので、食料確保に困ったことから明らかである⁹³⁾。さらに鉱物資源に関しては、1860年頃から盛んに金探しが行なわれたにもかかわらず、隣接するクックシティでは見つかったものの、イエローストーン公園予定地域内では発見されていなかったことが支持派には好都合であった。その意味では金を発見できなかった採鉱師たちも、間接的ながら、公園の設立に貢献している。また、地域を覆っているロジボールパインは木材としての価値が低かった上、東部では運河や都市水道等の水利維持を目的として森林保全が始まったが、イエローストーン水系の影響を

受ける都市も下流になかった。

この審議過程に関してランテ⁹⁴⁾⁹⁵⁾は開発サイドからの反対を封じるために無用の土地であることが強く主張されたこと、および、賛成派もほとんどは自然環境ではなく間欠泉や滝等のモニュメントとしての対象の保護を目的としていたことを指摘している。

この国立公園「無価値」論を提唱したランテに対して論争が提起されている。異議を唱えたセラーズ⁹⁶⁾は、水や木材、観光などの資源があることは知られていたのだから、それでも国立公園になったのは既に保全意識が芽生えていた証拠であると論じた。これに対して、ランテは「無価値」を1864年にヨセミテ法案が議会で提出された際に提案者のコンネス (John Conness) が述べた意味で使ったと説明した。すなわち、コンネスは国民一般による農林業などの開拓目的には価値がないが景観はすばらしいという使い方をしており、その「価値」には観光は含まれず、かつ大衆的なものであるという見解を示した。また、セラーズが「無価値」であるという議会での主張を単なる政治家のレトリックであると認識したのに対して、南北戦争直後の利己的な時代背景からすれば真剣なものであったと反論した。この両者の議論をコメントしたコックス (Cox) は、結局、両者の意見の相違は観光を資源「価値」に含めるのかどうかという定義の違いだと述べている。すなわち、イエローストーンに関しては、景観資源を利用する観光は、農牧業や鉱業などの産業には含まれていない。その背景には、勤勉を評価し観光などの娯楽を罪悪視する清教徒的意識が反映されている。

観光資源としての価値は探検時代から認識されていた。だからこそ、短期的には債券の販売促進、長期的には魅力ある沿線の土地売却と支線によるイエローストーン観光を期待したNPRRが公園運動を形成した。それを受けて、ラングフォードはスクリブナー誌の記事で鉄道敷設による観光増加と経済発展を論じ、ハイデンや新聞も同様な考えを示している。また、観光開発に政府が関与すべきではないという意識の議会では観光価値は議論されなかったものの、公園支持者と鉄道支持者が一致していたことおよびホテルなどの観光業者からの地代で管理費を賄う条項が公園法に規定されていることから、観光資源としての価値は了解事項であったと言える。

1878年2月21日付けの手紙でハイデンは当時を回顧して、少なくとも数年は管理予算を請求しないから経済的負担はないことを強調しなければ法案は成立しなかったと述懐している⁹⁷⁾ことから、南北戦争後の逼迫した財政状態がわかる。

ゆえに公園設置法は公園に観光旅行に訪れる人が期待するような間欠泉や渓谷等の私有化を阻止、保護することによって、内務長官が委託した鉄道資本による質の高

いリゾート開発を推進するという意図があったと理解できる。換言すれば、公園法は環境保全を目指したのではなく、私有化を排除することによって開発の方向を観光に向けたものと理解できる。そのように読み取れば保護と利用を規定した設置法には何の矛盾もない。

(3) 公園範囲の決定

ナッシュ⁹⁹⁾は公園の設立運動者は滝とか間欠泉などのモニュメント保護を目的としていたが偶然で広大な自然環境が保全されることになったと述べ、公園設置によってウィルダネス環境も保全したことが1880-90年代には時折ながらも理解されたと考えている。この面積の広さに関しては、まずそれだけの土地が未開拓のまま残されていたというアメリカの資源の豊かさが前提となっている。

ナショナリズムを鼓舞するためのモニュメントとしての公園化であれば、もっと狭い範囲で十分であったはずだが、ハイデンは未発見の珍奇な景観や地熱現象等の「興味深いもの (curiosity)」が周辺に存在する可能性があるという理由で広い範囲を求めた。彼はその規定理由として、その地域の標高が6,000フィート以上であり火山性の地域であるから、農業も工業も牧畜にも適さず、科学的利用が可能に過ぎないと述べているから、広大であっても支障がないと認識していた⁹⁹⁾。

この広大さから、科学的利用として自然環境保全を意図していたという考えも提示されている。だが、ドーンの報告書に記録され、ハイデンが推し進めた科学的利用の実態は、資源開発のための基礎調査であった。厳しい財政状態の政府が費用を負担して未開発地の調査するように、開拓に先立つ資源および適性調査の意味合いの強いもので、いわば、文明を西部にもたらすための先遣隊であった。ゆえに、1871年の調査はモンタナ側からワイオミングに抜ける鉄道の設置可能性を確かめようとし、予算が増加した翌年の調査では南北2隊に分けて、調査を進めたのである。さらに、1878年にも調査に訪れていることから、今後も私有化されない調査地域を確保したいと言う実利的な科学者ハイデンの欲望も反映されていると考えられる。

広がりをもった空間の保全は1865年にヨセミテに関わったオルムステッドが提案しているが、その報告は近年まで埋没していたので、ヨセミテにもイエローストーンにも彼の考えは反映されていない¹⁰⁰⁾。さらに、そのころまだ生態学は存在せず広大な面積のごく一部しか踏査されていない状況では、公園を生態系として捉えていたとは考えられない。広大な面積が生態系の維持のために不可欠であるということが知られるようになったのは後のことである。

7. 成立過程と理念の理想化

国立公園の発展過程の中で、公園空間が自然環境の保全を目的し、公園が人々の公共の利用のためにその私有化を阻止すると言う利他的な思想から創設されたという理念が浮び上がってくる。ここでは前章で検討した成立史がどのようにして理想化されていったかを、文献から追ってみる。

(1) ラングフォードの日記とその矛盾

ラングフォードの日記¹⁰¹⁾によるとウォッシュバーン探検隊はイエローストーン地域で最後となる1870年9月19日の夜にマディソン分岐のファイアホール (Firehole) 河畔でキャンプした折、この地域の所有について議論したことが記されている。その中で、メンバーの1人、法律家のヘッジスが、この全域を私有化しないで国立公園としてすべてのアメリカ人が楽しめるようにすることを提案し、「彼の提案は1人を除いたメンバーから即座に好意的に受け止められた。そして、その時以来、我々の熱意は増大した。」と記されている。この1人が誰かは記されていないが、ラングフォードが日記の中でスミス (Jake Smith) 隊員を嫌悪していたことから、彼ではないかと推察される。

ラングフォードの日記の復刻版の前書きでヘインズも疑問を述べているが、このエピソードがチッテンデンの著書の中で紹介されて以来、焚き火物語 (Campfire Story) として広く知られるようになり、日本の文献にも掲載されているほどになった。しかしながら、最初に述べたように、自然公園の思想はすでに何人かによって提唱され、実際にヨセミテという前例もある。

そもそもこの日記のタイトル「イエローストーンの発見」自体からして矛盾を秘めている。前述したように先住民は数千年前から知っている上、猟師や採鉱師など100人以上の白人も19世紀初頭から足を踏み入れている。探検としてもフォルサム-クック隊が前年に訪れ、ラングフォードらは彼等から情報を得ている。さらに、これらのことについてラングフォード自身が言及しているのである。

彼の日記が発刊されたのはこの探検から35年後の1905年で、彼は74歳であった。探検直後に彼が寄稿した新聞の記事にも、その後の各地での彼の講演録にも、さらに1871年5月にスクリブナー誌に掲載された彼の記事にも、イエローストーン公園化に関して全く言及されていない。また、ラングフォードは1871年1月21日のニューヨークでの講演の際に国立公園化について言及したと主張し、チッテンデンもラングフォードの主張を掲載しているが、残された講演原稿¹⁰²⁾には、NPRRの延長によって観光が容易になる可能性については言及されているものの、国立公園設置に関しては何も述べられていない。また、ラングフォードはナイアガラの先例を示しイエローストーンの同様な保全を訴えたと述べているが、ナイアガラ保

留地の成立がイエローストーンより後の1885年であることを考慮すると矛盾する¹⁰³⁾。このような矛盾を踏まえて、クランプトン¹⁰⁴⁾、フス¹⁰⁵⁾、ヘインズ¹⁰⁶⁾、ランテ¹⁰⁷⁾らが、その日記の信憑性に疑問を投げかけている。

さらに検討すると、この探検の記録はラングフォードの他に提案者とされるヘッジス、ジレット、トランブル、ドーン、ハウザーが残しているが、エバーツの搜索のため別行動であったジレットを除外しても、他の隊員らの記録に何も残されていないのは、熱中した議論であったというラングフォードの記述と矛盾する。

9月8日にエバーツが行方不明となってから9月16日まで、全員で搜索を行ったが、食料が乏しくなってきたため、諦めて移動を開始したという状況の上、諦め切れないジレットは騎兵2人とともに搜索をまだ継続していた。そのような気が重い雰囲気でのような話に熱が籠るとは考えられない。

また、9月19日に焚き火を囲んで国立公園化を主張したはずのヘッジスが、11月の新聞でヨセミテの前例にならったモンタナ準州(1889年に州となる)の保留地とすることを提案しているのも一貫性がない。

以上の矛盾から、この日記はラングフォードの誇張癖か出版社の販売促進への配慮の結果であると思われる。

(2) チッテンデンの著書の影響

イエローストーン史におけるウォッシュバーン隊のヘッジスによる公園提案の紹介は、1895年に初版されたチッテンデンの著書に始まる。チッテンデン(1858-1910)は工兵隊の技師としてイエローストーンの今日のループ道路やガーディナー側の北口のルーズベルト門を設計する一方、個人的に歴史に興味を抱き、18-19世紀に毛皮を求めてロッキーを闊歩した猟師たちの記録も残している。いずれも優れた内容で何度も版を重ねるほど好評であった。とくにイエローストーン史では、1832年のカトランの“Nation's Park”の提案を紹介するとともに、技術者らしく鉄道導入の問題に関しても議論しているように視野の広さを感じさせる。

しかし、ラングフォードの日記では1人を除いて公園化に賛成したとなっていたのが、チッテンデンの書では“acceptance with other members of the party”となり全員一致を示唆するような文章となっている。これが全員賛成として流布することになった。さらに日記では単に国立公園とするという内容であったが、恒久に人々の利用に供する内容となっている。また、ラングフォードが1871年のニューヨークでの講演の際に、国立公園化を示唆したと述べたのを、そのまま受入れて記述している。本書の出版はラングフォード日記の出版の10年前であるから、著者はラングフォードから直接得た情報を信じて記述したのであろう。さらに、今日の研究成果から判断すればイエローストーンを訪問したの最初の白人

をコルターとし、コルターズヘルをイエローストーンとした点も誤っている。

他方で、チッテンデンは、第2版では一種の民俗公園の提案であるから異なると考え変更したものの、初版ではカトランの提案を国立公園のオリジンとして評価し、また、1869年にフォルサムがウォッシュバーンに公園化のアイデアを提供していることにも言及している。この様にチッテンデンは国立公園化の考えの起源を論理的に述べているのであるが、その読者の間で焚き火物語だけが独立して歩き始めてしまった。

(3) 焚き火物語の紹介

このチッテンデンの書物を通じて広まった焚き火物語は、1920年代にマザー局長が公園運動を推進した際に著されたヤードの書物^{108,109)}には掲載されていないが、1922年のキャメロンの国立公園局紹介図書¹¹⁰⁾の中で、引用されている。1940年頃には政府刊行物にまで掲載されるようになった¹¹¹⁾。最近では、設置100年記念の1972年に公園局が出版した一般書¹¹²⁾にも焚き火物語が引用されている。

次に、専門書を調べると定評のあるイセ¹¹³⁾が、参考文献として焚き火物語に疑問を呈したクランプトンの文献もあげているにもかかわらず、チッテンデンの説をそのまま紹介しているのは意外である。さらに、大学の教科書にまで焚き火物語が登場してくる。たとえば、ブロックマン¹¹⁴⁾の野外レクリエーションの教科書でもその信頼性に疑問を呈しながらも、チッテンデンの焚き火物語と「コルターの地獄」が引用されている。さらに、造園史の教科書として広く利用されているニュートンの著書¹¹⁵⁾でも「コルターの地獄」をイエローストーンとするとともに、焚き火の話を紹介し全員が賛成したかのような記述となっている。

また、間接的ながら百科事典¹¹⁶⁾にも掲載されたように、アメリカのほとんどの国立公園紹介文献や旅行ガイドなどの一般書に載せられた。一般書は専門書よりも購読者層が広いので、その影響も専門書以上に大きいのではなからうか。たとえば毎年のように改定されているランドマクナリー社の国立公園ガイドは50万部が売れている¹¹⁷⁾。また、一般書では内容自体もラングフォードの日記よりも一層脚色され、学校劇の脚本¹¹⁸⁾まで出版されるに至った。

(4) インタープリテーションの影響

このような文献での紹介に加えて、1922年の公園設置50周年記念式典はこの焚き火の場所であるマディソン分岐で取り行われ¹¹⁹⁾、さらに1972年の100周年記念では、その場所に記念碑が建てられ(写真-2)、隣接の展示館(Madison Museum)にもその解説が掲示された。さらに1938年には内務省内にある博物館の国立公園局のコーナーにも焚き火のシーンが展示された(写真-3)。

写真-2 ファイアーホール河畔の記念碑
(Campfire Story Monument on the Firehole River, 1988)

このようなディスプレイとあいまって、文献以上に焚き火物語が人口に膾炙するのに影響を及ぼしたのはレンジャーによるインタープリテーションである。

イエローストーンにおけるインタープリテーション活動は1919年にオルブライトが園長として赴任した際に開始された。1921年にナチュラリストと呼ばれたスキナー (Milton Skinner) によって博物館が設置され、教育プログラムが始まった¹²⁰⁾。1926年に作成されたインタープリテーションマニュアル¹²¹⁾を調べると焚き火物語が掲載されている。すなわち、レンジャーたちはこのマニュアルを参考にして最近まで、直接関連文献を読む人の数とは比較にならない莫大な訪問者たちに、この話をビジターセンターや夜間のキャンプファイアを囲みながら紹介していた。

1932年のクラプトンの著書は内務長官への公式報告書で、政府印刷局で出版されたものである。ヘインズはイエローストーン公園に勤務した公園専属の歴史家であり、彼の著書も政府出版局によって刊行されている。このように成立史が政府の専門家によって明らかにされていながら、同じ公園行政では理想化した成立物語を広めていたのは、研究成果よりも公園および公園局のイメージ向上と国民の支持拡大が優先された結果であろう。半世紀にわたって公園局は成立神話を流布させ、自己矛盾は一層増大した。そのことはチェイス¹²²⁾が公園の野生動物管理に関して指摘したように望ましくないデータの無視、管理正当化のための成果収集など科学成果の操作と結びつくものを感じさせる。

しかしながら、公園局もその名の通り納税者にサービスを提供する1機関であるから、国民の支持なしには活動できない。そのため利用者の支持を得やすい方向に進まざるを得なかったというジレンマが無視できない。すなわち、情報を受け取る側の利用者も、鉄道会社の利益のため設置運動よりも、ロマンに満ちた焚き火物語の方を望んだのである。

写真-3 内務省博物館の焚き火物語の展示
(Campfire Story Exhibit in the Interior Museum, 1991)

最近の公園局による文献では国立公園の考えの発案者はヘッジスではなくカトランであると訂正し、マディソン博物館の焚き火物語の展示も撤去された。しかし、河畔の公園設置百年記念碑と、内務省博物館の焚き火の光景の展示は今も残る¹²³⁾。

(5) 日本におけるアメリカの国立公園紹介

明治・大正期の日本におけるアメリカの国立公園の紹介に関しては丸山¹²⁴⁾が調査しているが、その時代の文献にはイエローストーンの焚き火物語は言及されていない。それが紹介されるのは戦後である。日本では1948年の東良三の著書にこの話が掲載されている¹²⁵⁾。

その後の国立公園関係出版物を調べてみると、アメリカの国立公園に日本人が大半押し寄せる今日に至るまで、その物語は国立公園の誕生の説明の中で、百科事典まで含め一般書か専門書であるかを問わず紹介されている。

それらの文献には出典が全く示されていないので、実際にイエローストーンを訪れ展示やインタープリテーションから知ったのか、あるいは公園ガイドなどの記述を紹介したものか不明であるが、内容を比較した結果、いくつかのアメリカの国立公園の紹介記事はヤード、ティルデン¹²⁶⁾などのものを抄訳していると推察される。ティルデンの旧版は間接的ながら焚き火物語を紹介しているものの、1986年の改定版ではNPRRの影響を示唆している。

日本の国立公園紹介者は、専門書ではなく公園のパンフレットや旅行ガイドを参考にして、自分でも半信半疑であったが、読者に受けそうな話なので引用したのであろう。日本でも鉄道と公園設置運動が強く結びつき、外人旅行者からの外貨獲得がその主たる目的であったが、それに類似する話よりも公園の崇高な理念を示すのが適当と考えられていたのであろう。

さらに日本では、国立公園の紹介者の多くが、それを推進する立場にあったので、アメリカと同様、公園普及

に都合の良い内容を選択した可能性もある。アメリカでも日本でも、歴史家と官僚ではその歴史の解釈が異なる。歴史家は客観性を重んじるのに対して、官僚は自らの勢力拡大に役に立つ情報を評価するであろう。1990年に至るまで日本の文献においても繰り返されているのは、ジャーナリスティックな物語としての魅力と、公園の理想の提示を含んでいたことによるものであろう。

8. おわりに

イエローストーンの設置背景は、農鉱業資源がとばし地域でナショナリズムを誘う景観資源を活用して、観光による経済効果を引出すという鉄道会社などの功利主義的な発想が原動力であった。その後ロマンを求めた国民とその国民の支持を必要とした公園局が理想化を進めた。このようにしてでき上がった国立公園の提供する「自然環境」を1963年のレオポード報告の中の「もっともな幻想 (reasonable illusion)」ということばでシュレリー¹²⁷⁾はエッセイに記している。

彼は人々が国立公園に求めている手つかずの自然というものは幻想にしか過ぎないと述べている。その例として、今日イエローストーンは釣人にとっては憧れの場所であるが、実際にはその河川に生息するサケ・マス類は、軍隊管理時代の1891年頃に孵化場を設置して始まった外来種の孵化、放流の成果である。また、それらを餌とするペリカンや、シカなどを襲うと考えられたオオカミは排除され、騒々しいキツツキも宿泊施設のそばから追い払われている。さらに、観光客の期待するクマは残飯で呼び集められた。彼は公園来訪者も、ディズニーランドと同様に、現実よりも幻想を国立公園に期待し、管理された「自然」を求めているのだから、幻想を提供することで十分ではないかと述べている。

しかし、それが1988年の大火災¹²⁸⁾のように、国民の期待する公園が、現実の公園の管理方針と掛け離れていることが露呈された場合、大きな困難が生じる。シンプソン¹²⁹⁾は、自然状態 (natural condition) が残っているとする幻想と人間の手がかなり加わっている現実のギャップをそのままにして増大する利用者のニーズに対応せざるを得なかった公園局が陥ったアンビバレンスを「2つの公園の物語」として述べている。さらに、その幻想自体も初期のロマン主義的なものから、近年では生態学的なものに変化していることを言及している。

本来ならばそのような矛盾を解消すべき公園紹介文獻やインタープリテーションが、公園および公園局に対する支持を得ようとするしたが故に、むしろ溝を拡大せざるを得なかった事実は皮肉である。近年日本でもインタープリテーションが重視されてきたが、その影響力を考慮すると、提供する情報の内容の重要性を痛感させる。幻想と現実のギャップを埋めることに今後のインタープリ

テーションの使命があろう。

最後に、資料収集では主として首都ワシントンの議会図書館、内務省図書館、国立公園局ハーバースフェリーサービスセンター図書館、同デンバーサービスセンター図書館、イエローストーン国立公園図書館にお世話になった。

引用・参考文献

- 1) Nash, Roderick (1970): The American Invention of National Parks, *American Quarterly*, 22(3): 726-735
- 2) 伊藤精悟編 (1991): 森林風致計画学, 文永堂出版, 158-172
- 3) Chittenden, Hiram Martin (1964): the Yellowstone National Park, Univ. of Oklahoma Press (1895年の初版の復刻版)
- 4) Chittenden, Hiram Martin (1905): the Yellowstone National Park (2nd ed.), Stewart & Kidd Company
- 5) Crampton, Louis C. (1932): The Early History of Yellowstone National Park, Dept. of Interior
- 6) Buck, Paul Herman (1922): The Evolution of the National Park System of the United States, A Thesis Presented for the Degree of Master of Arts, The Ohio State University 5-20
- 7) Haines, Aubrey L. (1974): Yellowstone National Park, its Exploration and Establishment, Government Printing Office
- 8) Haines, Aubrey L. (1977): The Yellowstone Story, Vol.1, Yellowstone Library and Museum Association
- 9) Bartlett, Richard A. (1974): Nature's Yellowstone, Univ. of New Mexico Press.
- 10) Janetski, Joel C. (1987): Indians of Yellowstone, Univ. of Utah Press
- 11) Gowans, Fred R. (1989): A Fur Trade History of Yellowstone Park, Mountain Grizzly Publications
- 12) Haines (1977): *ibid.*, 35-38
- 13) Mattes, Merrill (1962): Colter's Hell & Jackson Hole, Yellowstone Library and Museum Association and the Grand Teton Natural History Association
- 14) Daniel Potts' Letter (1827), Sweet Lake, July 8 (Gowans, *ibid.*, 187-188所収)
- 15) Jowe Meek's Narrative (1870) (Gowans,

- ibid., 192-194所収)
- 16) Ferris, Warren A. (1842) : Wild Western Scenes, Rocky Mountain Geysers, Western Literary Messenger 2 (2) : 12-13, July 13 (Gowans, ibid., 197-202所収)
 - 17) Mattes (1962) : ibid., 57
 - 18) Haines (1977) : ibid., 46-47
 - 19) Russell, Osborne (1955) : Journal of Trapper, ed. Aubrey L. Haines, Oregon Historical Society (Gowans, ibid., 227-259所収)
 - 20) ロデリック・ナッシュ (1989) : 人物アメリカ史 (上), 193-228, 新潮社
 - 21) Father Pierre-Jean deSmet to Messrs. Albert and Campbell, July 1, 1857 (Gowans, ibid., 266-267 & Map18所収)
 - 22) Langford, Nathaniel Pitt (1975) : The Discovery of Yellowstone Park, Introduction xxix, Univ. of Nebraska Press, Lincoln (1905年の初版復刻版)
 - 23) Haines (1977) : ibid
 - 24) Reynolds, W.f. (1868) : Report on the Exploration of the Yellowstone River, 40th Congress, 2nd Session, Senate Executive Document No.77, Government Printing Office (Gowans, ibid., 268-272 & Map 21所収)
 - 25) Mattes (1962) : ibid., 81-83
 - 26) Haines (1974) : ibid., 45-46
 - 27) Haines (1977) : ibid., 91-94
 - 28) Langford (1975) : ibid., Introduction xxxiv
 - 29) Cook, C.W. (1870) : The Valley of the Upper Yellowstone, Western Monthly, July (Crampton, ibid., 83-89所収)
 - 30) Haines (1977) : ibid., 101-102
 - 31) Haines (1977) : ibid., 103
 - 32) Harnsberger, John L. : Jay Cooke and Minnesota, The Formative Years of the Northern Pacific Railroad, 1868-1873, Arno Press, 1981 (1956年の論文復刻版)
 - 33) Gray, John S. (1972) : Trials of A Trailblazer, P.W. Norris and Yellowstone, Montana Western History, 12(3) : 54-63
 - 34) Haines (1974) : ibid., 56
 - 35) Haines (1972) : ibid., 135
 - 36) Doane, G. C. (1871) : Report of on the So-Called Yellowstone Expedition of 1870 to the Secretary of War (Crampton, ibid., 113-148所収)
 - 37) Hirsch, Sarah (1983) : The Art of the Yellowstone, Thomas Gilcrease Museum Association
 - 38) Haines, Aubrey L. (1972) : Lost in the Wilderness, Truman Everts' 37 days of terror, Montana Western History, 22(3) : 31-41
 - 39) Langford, N.P. (1870) : The Yellowstone Expedition, Helena Daily Herald, Sep. 26 (Crampton, ibid., 90-91所収)
 - 40) Washburn, H.D. (1870) : The Yellowstone Expedition, Helena Daily Herald, Sep. 30 (Crampton, ibid., 92-96所収)
 - 41) Cockhill, Brian, ed. (1972) : The Quest of Warren Gillette, Based on the Original Diary, Montana Western History, 22(3) : 12-30
 - 42) Hedges, Cornerius (1870) : Yellowstone Lake, Helena Daily Herald, Nov. 9 (Crampton, ibid., 107-110所収)
 - 43) Haines (1977) : ibid., 135
 - 44) Early (1984) : ibid., 15-16
 - 45) Langford, N.P. (1871) : The Wonders of Yellowstone, Scribner's Monthly, 2(1) : 1-17
 - 46) Langford, N.P. (1871) : The Wonders of Yellowstone, Scribner's Monthly, 2(2) : 13-128
 - 47) U.S. Geological Survey (1980) : Ferdinand Vandiveer Hayden and the Founding of Yellowstone National Park, U.S. Government Printing Office
 - 48) Haines (1977) : ibid., 48-49
 - 49) Hirsch (1983) : ibid., 8
 - 50) Haines (1974) : ibid., 109および Bartlett (1974) : ibid., 206-207
 - 51) Haines (1977) : ibid., 75
 - 52) Haines (1977) : ibid., 166
 - 53) Crampton (1932) : ibid., 28-35
 - 54) Bartlett (1974) : ibid., 188
 - 55) Haines (1977) : ibid., 116
 - 56) Chambers, Frank, comp. (1988) : Hayden and His Men, Francis Paul Geoscience Literature
 - 57) Selmeier, Lewis W. (1972) : William Henry Jackson : First Camera on the Yellowstone, Montana Western History, 22(3) : 42-53
 - 58) Ayers, Linda (1987) : Yellowstone, the Poetry of Power, Works of Thoman Moran, Art Museum, Jackson Hole
 - 59) Truettner, William H. ; Bolton-Smith, Robin (1972) : National Parks and American

- Landscape, Government Printing Office
- 60) Findley, Rowe (1989) : The Life and Times of William Henry Jackson, National Geographic, 175(2) : 216-254
 - 61) Goetzman, W.H. & W.N. (1986) : The West of the Imagination, 178, W.W Norton & Company
 - 62) Hirsch, Sarah (1983) : *ibid.*, 16-17
 - 63) Haines (1974) : *ibid.*, 121 & 127
 - 64) Haines (1974) : *ibid.*, 119
 - 65) Haines (1974) : *ibid.*, 180
 - 66) 伊藤太一 (1990) : マキノ国立公園の変遷からみた初期の国立公園の実体, 造園雑誌, 53(5) : 25-30
 - 67) Crampton (1932) : *ibid.*, 37-38
 - 68) Haines (1977) : *ibid.*, 196-198
 - 69) Haines (1977) : *ibid.*, 214
 - 70) Early (1984) : *ibid.*, 48
 - 71) Haines (1977) : *ibid.*, 214-215
 - 72) Haines (1977) : *ibid.*, 203-204
 - 73) Haines (1977) : *ibid.*, 212
 - 74) Haines (1977) : *ibid.*, 241-242
 - 75) Haines (1977) : *ibid.*, 244
 - 76) Haines (1977) : *ibid.*, 244-245
 - 77) Norris, P.W. (1881) : Annual Report of the Superintendent of the Yellowstone National Park, to the Secretary of Interior for the Year 1880, Government Printing Office
 - 78) Haines (1977) : *ibid.*, 264-269
 - 79) Haines (1977) : *ibid.*, 271
 - 80) Hampton, H. Duane (1966) : The Army and the National Parks, Forest History, 10 (3) : 2-17
 - 81) Hampton, H. Duane (1971) : How the U.S. Cavalry Saved Our National Parks, Indian Univ. Press
 - 82) Hampton, H. Duane (1972) : The United States Army and the National Parks, Montana Western History, 22(3) : 64-79
 - 83) Crampton (1932) : *ibid.*, 36
 - 84) Haines (1977) : *ibid.*, 206
 - 85) Early, Katherine E. (1984) : "For the Benefit and Enjoyment of the People", Cultural Attitudes and the Establishment of Yellowstone National Park, Georgetown Univ. Press
 - 86) Tejada-Flores, Lito, ed. (1988) : Yellowstone to Yosemite, Early Adventure in the Mountain West (原著Bryant, William Cullen (1872) : Picturesque America)
 - 87) Runte (1987) : National Parks (2nd Ed.), 59, Univ. of Nebraska Press
 - 88) Early (1984) : *ibid.*, 42-43
 - 89) Hampton, H. Duane (1981) : Opposition to National Parks, Journal of Forest History, 25(1) : 36-45
 - 90) Ise (1962) : *ibid.*, 17-18
 - 91) Szasz, Ferenc M. (1977) : Wheeler and Holy Cross, Colorado's "Lost" National Monuments, Journal of Forest History, 21(3) : 133-144
 - 92) Goetzmann (1986) : *ibid.*, 170-182
 - 93) Chase, Alstone (1986) : Playing God in Yellowstone, The Atlantic Monthly Press
 - 94) Runte, Alfred (1987) : *ibid.*, 33-64
 - 95) Runte, Alfred (1977) : The National Park Idea, Origins and Paradox of the American Experience, Journal of Forest History, 21(2) : 64-75
 - 96) Sellars, Richard W. et al. (1983) : The National Parks, A Forum on the "Worthless Lands" Thesis, Journal of Forest History, 27(3) : 130-134
 - 97) Crampton (1932) : *ibid.*, 37
 - 98) Nash, R.W. (1963) : The American Wilderness in Historical Perspective, Forest History, 6(4) : 2-13
 - 99) U.S. Geological Survey (1980) : *ibid.*, 18-25
 - 100) Sax, Joseph L. (1976) : America's National Parks, Natural History, (10) : 58-87,
 - 101) Langford (1972) : *ibid.*, 117-118
 - 102) Langford, N.P. : 自筆講演原稿 (1870), イエローストーン図書館所蔵
 - 103) Haines (1977) : *ibid.*, 138
 - 104) Crampton (1932) : *ibid.*, 18-19
 - 105) Huth, Hans (1984) : Yosemite, the Story of an Idea, Yosemite, Natural History Association (reprinted from Sierra Club Bulletin, 1948)
 - 106) Haines (1977) : *ibid.*, 129-130
 - 107) Runte (1987) : *ibid.*, 41-42
 - 108) Yard, Robert Sterling (1920) : Glimpses of Our National Parks (初版1915)
 - 109) Yard, Robert Sterling (1921) : The Book of the National Parks, Charles Scribner's Sons
 - 110) Cameron, Jenks (1922) : The National Park Service, 3-4, D.Appleton and Company
 - 111) Huth, Hans (1948) : *ibid.*, 36

- 112) Clary, David A. (1972) : "The Place Where Hell Bubbled up", A History of the First National Park, Office of Publications, National Park Service
- 113) Ise, John (1961) : Our National Park Policy, 15, Johns Hopkins Univ. Press
- 114) Brockman, C.F. ; Meriam, L.C.Jr. (1973) : Recreational Use of Wild Lands (2nd ed.), 42-43, McGraw-Hill
- 115) Newton, Norman T. (1971) : Design on the Land, The Development of Landscape Architecture, 518, The Belknap Press of Harvard University Press
- 116) Encyclopedia Britannica (1967) : national parks and nature reservesの項, 68
- 117) Frome, Michael (1967-) : National Park Guide, Rand McNally
- 118) Hansen, Bert (1957) : The Birth of Yellowstone National Park
- 119) Albright, Horace Marden (1972) : Memories of the Great and Near-great in Yellowstone, Montana Western History, 22(3) : 80-89
- 120) Chase (1984) : *ibid.*, 235-236
- 121) Yellowstone National Park (1926) : Ranger Naturalists Manual of Yellowstone National Park
- 122) Chase (1986) : *ibid.*
- 123) 国立公園局歴史専門官 Barry Mackintosh 氏およびイエローストーン古文書専門官 Tom Tanke rsley 氏に照会
- 124) 丸山宏 (1986) : 黎明期ナショナル・パークについての情報とその紹介者たち, 京都大学演習林報告, (57) : 268-282
- 125) 東良三 (1948) : アメリカ国立公園考, 淡路書房
- 126) Tilden, Freeman (1986) : The National Parks, Alfred A. Knopf (初版1951)
- 127) Schullery, Paul (1979) : A Reasonable Illusion. Rod and Reel, the Journal of American Angling (Nov./Dec.) (Schullery, Paul (1984) : Mountain Time, 73-95にもこのエッセイが転載されている)
- 128) 伊藤太一 (1991) : イエローストーン地域における大火災の影響と意義, 京都大学演習林集報, (21) : 163-182
- 129) Simpson, John (1987) : A Tale of Two Parks. Landscape Architecture (May/June), 60-67

(1992. 1.16受付, 1992.10.16受理)

Summary : It is often said that the Yellowstone National Park was established to conserve the natural environment and to be used for public recreation. In this paper, this thesis is carefully examined by tracing the formation process described in various documents. Then, the idealizing process of the national park idea was also investigated.

This research clarified that Yellowstone was established not for environmental conservation but for tourism which was promoted by the Northern Pacific Railroad, and that the monumental landscape was protected as scenic resources for that purpose as well as for the nationalism Americans are looking for at that period.

The idealization of the objectives of the national park was promoted by the National Park Service as well as supporting people. Especially interpretation spread the idealized images of the national park. As the result, the gap between the real park conditions and the image was widened, and the park management was left behind the dilemma.